

『ずく<sup>1</sup>』を出して繋がる、元気な千曲市を目指して  
～花と緑を使った事業をモデルとして～

長野県千曲市 湯本 一稀



はじめに

### 1-1 研究の背景

近年、全国の自治体のまちづくり分野において必要不可欠になっているのが、協働という概念である。自治体によっては総合計画にそれを位置づけ、まちづくりを進めているところもあるだろう。千曲市においても2007年に策定された総合計画の後期基本計画（2012年から2016年までの5年間で計画期間）に、協働のまちづくりを掲げている（図1）。今年度が計画期間の最終年度にあたることから、千曲市において協働のまちづくりがどのくらいすすんでいるのかという問題意識が本研究の背景にある。

### 1-2 問題意識

千曲市における協働のまちづくりの課題について考えてみた。

そもそも、なぜ協働が必要なのか。住民ニーズの多様化や行政課題の複雑化・高度化により、住民から自治体へ求められる公共サービスの範囲がとて大きく広がっている。行政で包括できない範囲を行政と住民とが協働すること、これが協働の必要性であると考えられる。地方自治は、団体自治と住民自治の両輪で成り立っている。その住民自治とは、「自治体に委ねられた団体内部の問題を解決する際に、住民の意思を最大限尊重すること」と阿部斉放送大学名誉教授は述べている（『現代日本の地方自治』p.152）。

千曲市について考えると、千曲市は果たして市民の意思を最大限尊重しているのか。行政の独りよがりになっているのではないかと疑問に感じた。

例えば、かつて、千曲市には屋代駅から長野市を超えて須坂市まで通っていた「長野電鉄屋代線」という路線があった。しかし、2012年に乗客数の減少等の理由により廃線となった。その跡地利用について、長野市・須坂市と共に話し合いが行われているが、廃線から4年が経つ今も、利用計画が何も策定されていない。

#### ① 基本理念

基本構想の根幹となる考え方として、次の3つの基本理念を掲げます。

##### 共生のまちづくり

市民一人ひとりの尊厳や人権が尊重され、個性や価値観を認め合う社会をつくるとともに、次代を担う若者をはじめ、あらゆる世代が共生し、未来への夢と希望を持って自分らしい生活と文化を創造できるまちをめざします。

##### 交流のまちづくり

輝かしい歴史や文化、自然などの資産や高速交通などの特性を生かし、新しい文化や産業をはぐくむため、国内外のさまざまな分野の活発な交流や連携をすすめる、人やまちの個性を磨き、魅力あるまちを舞台に躍動感に満ちた多彩な活動が展開される、創造性あふれるまちをめざします。

##### 協働のまちづくり

まちづくりの主体は市民一人ひとりです。地方分権時代における自主・自立のまちづくりを実現していくため、市民の積極的なまちづくりへの参画を促すとともに、様々な分野に特色のある人材をはぐくむまちづくりをすすめる、市民、企業、行政が役割を分担しながら、多彩な力が発揮できる協働のまちづくりをすすめます。

図1 千曲市総合計画 後期基本計画

<sup>1</sup> ずく…長野県の方言。根気、やる気、という意味。

時々、市民から跡地利用について、サイクリングロードにして欲しい等の提案はあるが、市は今後の方針等の理由により、市民の提案は受け入れられていない。市は市民に寄り添う姿勢が足りないのではないか。

千曲市に暮らす一市民として、市民の声がまちづくりに反映される千曲市にしたい。そのような想いからこのテーマを選択し、千曲市の協働のまちづくりがより発展するために本レポートに着手した。

### 1-3 研究の目的

本レポートは、

①千曲市の協働のまちづくりの現状分析を行い、課題を明らかにする

②協働のまちづくりに必要なキーポイントを提示する

③筆者が担当する協働事業にフォーカスして、モデル事業を提案する

という3点を目的とする。

レポートのフローを図2に示す。

まず、第1章では、本レポートにおける協働のまちづくりについての定義付けを行う。

第2章では、千曲市の協働のまちづくりは全国と比べてどの位置にいるのかを示し、現在行われている事業について分析し、課題を明らかにする。その課題をもとに、千曲市の協働のまちづくりに必要なキーポイントの仮説を提示する。

第3章では、先進事例として千葉県市川市の取り組みをあげ、前章で提示した仮説を整理する。

そして最後に、現在行われている協働事業に対して、千曲市の今後の協働のまちづくりの観点から提案を行うこととする。

## 第1章 協働のまちづくりとは

### 1-1 協働とは

「協働」と「まちづくり」という言葉は人によって定義が異なるため、それぞれ分けて考える。

まず、「協働」とは、「住民と自治体が対等で、何か共通のことを、それぞれの立場を守りながら協力してやり遂げること」だと大森彌東京大学名誉教授は定義している（「自治体職員再論」p. 230）。

千曲市においても、協働の定義を「市民と行政が、お互いに共通する目的の実現や地域

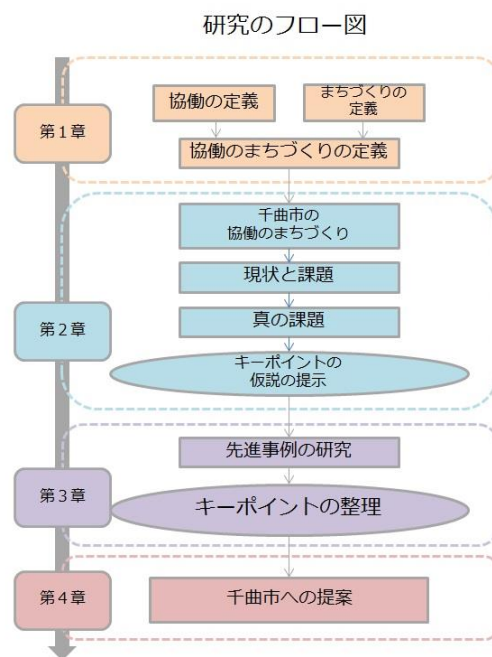


図2 レポートのフロー図

課題などを解決するために、それぞれが持つ資源や特性を活かし、役割と責任を分担しながら、対等の立場で連携・協力・補完し合って取り組みを進めること」としている（千曲市協働のまちづくり指針 p. 2）。

このことから、本レポートにおける「協働」とは、「市民と行政が対等で、共通の目的を、それぞれの立場を守りながら一緒になって達成すること」と定義する。

## 1-2 まちづくりとは

次に、「まちづくり」について考える。

千曲市の総合計画や各種計画をみると「〇〇なまちづくり」という言葉を目にする。私は毎日、気になる新聞記事をスクラップしているが、そこでも「まちづくり」という言葉を頻繁に目にする。

しかし、「まちづくり」とはなんだろうか。様々な場面で使用されているがあまりにも広義的かつ抽象的になってしまっているのではないか。

後藤春彦早稲田大学大学院教授も「景観まちづくり論」の中で、一般的な「まちづくり」の概念がとても曖昧に使用されていると指摘している。併せてその中で、まちづくりという用語を使用する際に、第1に都市計画による「居住環境からの発想」、第2に地域振興による「地域再生からの発想」、そして第3に基盤整備による「公共事業からの発想」の大きく3つの発想があると整理している。

第1と第2をコミュニティの観点から見ると、前者が「未成熟なところに新しいコミュニティを育て上げていく動き」に対し、後者は「閉鎖的に硬直化した既存のコミュニティを解体再生」することを指している。第3の発想は、「国土開発や都市開発など各種の公共事業」のことを指している。戦前の日本では、大字が村の基本であり、それがコミュニティの基本であった。自分たちのことは自分たちでという、ご近所同士の助け合いによるまちづくりの概念が確立されていた。戦前の千曲市においても同じことが言えたであろうが、今日の千曲市はそれが希薄化してきている。

このことから、私は、後藤春彦早稲田大学大学院教授の言う第2の発想が、千曲市にとって必要なまちづくりだと考えている。

よって、本レポートにおける「協働のまちづくり」の定義は、「行政と市民が共通の目的を一緒になって達成することで、硬直した既存のコミュニティの再生を図ること」とする。

また、本レポートで使用する他の用語を下記のように定義する。

「住民参加」…住民が事業や政策過程に参加して、意思表示を行うこと

「協働事業」…市民と行政が対等で、共通の目的を達成するために、一緒になって行う事業

## 第2章 千曲市の協働のまちづくりについて

### 1-1 千曲市の協働のまちづくりについて

アメリカのインディアナ大学の政治学教授ヴィンセント・オストロムが、「都市型サービ

ス供給システムの比較研究 (Comparing Urban Service Delivery Systems)』(1977年)の中で、協働の本質は、消費者が生産者になることであると述べている。つまり、公共サービスの受給者がサービスの本質を理解して、自らがその生産者になることが協働 (co-production) であるという。これが世界で初めて協働の概念を提示したと言われている。その後、これを荒木昭次郎が紹介し、日本の文脈の「協働」と関連させながら出版したのが、「参加と協働」(1990年)である。

それから10年後、北海道ニセコ町にて、日本初の自治基本条例が制定された。自治基本条例とは、住民自治に基づく自治体運営の基本原則を定めた条例である。ニセコ町では、「情報共有」と「住民参加」が徹底されている。ニセコ町の「住民参加」は、行政からの一方的な呼びかけによる参加ではなく、住民と行政が対等の立場であるとしている。

このように、世界各地で「協働」について重要視されているが、千曲市はどうだろうか。

千曲市は、旧更埴市、旧戸倉町、旧上山田町が2003年に合併して誕生した市である。市の中央部に千曲川が流れていることからこの名前が付いた。その旧3市町の総合計画に「協働」について掲げられているかを洗い出してみた(図3)。

「住民参加によるまちづくり」という言葉は、旧戸倉町で1982年に使われていた。また旧更埴市では1991年、旧上山田町では少し遅いが2001年に使われていた。そこで、旧3市町の住民参加によるまちづくりを調べてみると、総合計画に掲げられているだけで、ほとんど実践されていなかった。住民から道路を広げて欲しい、公園の遊具を直して欲しいなどの要望に対して市が応えるという「地域づくり計画<sup>2</sup>」がそれに当たっていた。

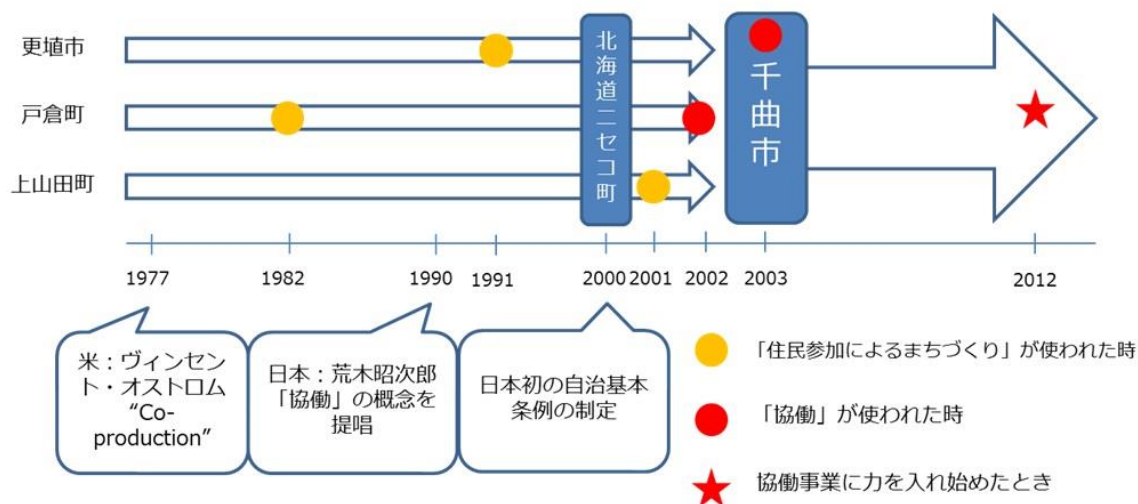


図3 千曲市の協働のまちづくりにおける歴史

<sup>2</sup> 地域づくり計画…市民にとっては身近な組織である区・自治会を単位として、自らが暮らす地域の将来を見通す中で、地域の問題やまちづくりに向けた意見・要望を聞き、取りまとめ、市民の主体的な参加と連携によって地域コミュニティの振興、環境整備等を計画的に進めることにより、住みよい「まち」をつくり上げていくための制度(地域づくり計画等に関する説明資料 抜粋)

その後、2003年に千曲市が誕生し、総合計画の役割を担う「新市建設計画」が策定され、その中で「協働」が使われているが、ここでも言葉を掲げただけで具体的な事業の実施はなかった。2007年に現在の総合計画が策定され、そのうちの2012年から2016年にかけての後期基本計画策定後、ようやく次の節で紹介するような協働事業が実践され始めた。

このことから、千曲市の協働のまちづくりはまだスタート段階にあることが分かる。

## 1-2 現状と課題

2012年に策定した後期基本計画に基づいて行われた事例を紹介する。私が3年間担当している「緑の基本計画推進事業」である。多くの市民が知恵と力を合わせ、緑地の適切な保全と緑化の推進を行うという本計画の目的に沿った事業を行う市民団体と委託契約し、計画の推進を図っている。

今年度で5年目を迎え、活動団体も年々増えているという成果が上がる一方、活動や団体自体の様々な課題が見えてきている。その課題を整理するために、筆者は、10月～11月に、今年度委託契約を結んでいる7団体の代表に、活動の課題点について直接ヒアリングをしたところ、表1のような課題が挙げられた。

意見数	ヒアリングをして得た課題
6	1) 新しいメンバーが入ってこない（高齢化している）。
6	2) もっと団体の活動を発信してほしい。情報発信・共有の面が弱い。
6	3) 他団体のメンバーと花や緑の活動について話し合う機会がほしい。
6	4) 他団体と連携事業をしたい。
4	5) 市の募集が市報とHPのみで、情報をキャッチしづらい。
3	6) 活動に積極的なメンバーが少ない。
3	7) 活動できる場（花壇や公園）がもっと増えればいい。
3	8) 市からの委託費がなくなってしまうと困る。
2	9) 市内にもっと公共花壇が欲しい。
2	10) 自主的に草取り等をしてくれるメンバーが増えてほしい。
1	11) 活動に対して意欲が少なく、指示待ちをしている感がある。
1	12) 女性しかいない団体なので、力仕事が困難で、他団体に知り合いがいると助かる。
1	13) 緑の基本計画を読んだことがないので、中身についてよく知らない。

表1 ヒアリングをして得た課題

### 1-3 協働のまちづくりのキーポイント

以上の課題から、下記の5つの真の課題に整理してみた。

- 1) 6) 10) 11)・・・【メンバー】
- 7) 9)・・・【場所】
- 8)・・・【資金】
- 2) 5) 13)・・・【情報】
- 3) 4) 12)・・・【他団体との連携】

この5つの「メンバー」「場所」「資金」「情報」「他団体との連携」を基に、本レポートで取り組むべき仮説を提示する。

#### ①【メンバー】 すぐだせメンバーの育成・発掘

市民と行政の協働や市民自らの活動が市内で活発に行われるように、市民と行政の人材育成と発掘を行う。すぐを出して活動に参加することで、硬直した既存のコミュニティが再生し、新しいメンバーが入ってこないという課題も解決できるのではないか。

#### ②【場所】 市民が活動できる場づくり

市民が活動できる場を行政が作ることで、市民の活動の幅が広がり、市民の輪も広がっていくのではないか。

#### ③【資金】 メンバーの連携による費用の抑制

たくさんのメンバーが活動に関わり、相互に連携を取ることで、活動に必要な資金が最小限になり、活動の継続性が生まれるのではないか。

#### ④【情報】 市全体に行き渡る情報共有・発信システム

市民と行政が一緒になって活動内容を共有・発信することで、活動している市民のやりがいにつながる。また、花や緑に関する活動をしたい市民に情報が行き渡れば、新たなメンバーの発掘につながるのではないか。

#### ⑤【他団体との連携】 コミュニティが生まれる、交流・連携の機会づくり

他の団体と交流・連携できる機会があれば、新たなコミュニティが生まれ、今後の活動に広がりが出てくるのではないか。

以上の5点が協働のまちづくりのキーポイントとして抽出された。

## 第3章 先進事例の分析

### 1-1 市川市の概要

市川市は千葉県の北西部に位置し、東京都と隣接している。都心から20km圏内に市域全体が含まれ、人口約48万人と、ここ数年増え続けている。市内にはJRや地下鉄メトロなど鉄道7路線、計16駅あり、東京駅へ19分、新宿駅へ28分と都心へ直結する路線が多いことや、東京湾岸道路などの自動車専用道路も多く通っていることから、交通の便がよく、東京のベッドタウンとして発展してきた。

また、オンラインサービスやGISの市民利用等のIT施策の充実や、地域づくりの主体であるボランティア団体やNPOなど、市民の自主的な活動に対して、個人市民税納税者等が

支援したい団体を選び、個人市民税額の1%相当額等を支援できる1%支援制度などの、画期的で新しい施策を展開している市である。

近年の市川市を見ると、新しい取り組みにチャレンジする市、だともうかもしれないが、一方で、古い歴史・文化が今でも色濃く残る市である。現在でも古くからのコミュニティや歴史・文化資源を活かした取り組みが市全域に存在しており、花植えや地域の清掃、自治会活動、伝統行事の伝承等が盛んで、ご近所同士の深い繋がりが各地に残っている。

しかし近年、コミュニティの希薄化が進み、地元の祭りへの若者の参加が減り、高齢者が家の外に出ないという課題もある。こうした課題を解決するために、市が身近な活動である「ガーデニング」に注目し、市民が主役と位置づけ、事業者、行政と協働で、1の成果が10にも20にもなるような取り組みを2011年から展開している。

## 1-2 協働のまちづくりの取り組み分析

千曲市における、5つの協働のまちづくりのキーポイントを整理するために、市川市の重要施策の1つ「ガーデニングシティ・いちかわ」を考察する。「花がとりもつ人のきずな みんながつながる優しいまち 花づくりで健康づくり 庭づくりで生きがいがづくり 彩りと美観で安心安全なまち」をコンセプトに、景観向上・協働促進・健康促進・市民交流を図っている。

### ①【メンバー】協働の花づくり

春と秋に専門家を招いて講習会を行い、種から花を育て、育てた花の一部を公共施設や近所の方へ提供している。あえて種から育てることで、花への理解を深めたり、育った花苗を活用する喜びを共有することを狙いとしている。

また、子どもたちへは「花育」を行っている。普段、土や花に触れる機会が少ないため、市内の全保育園を対象にし、花や緑に対する関心や知識を高めている。

市民が活動できる場を行政が提供していることで、市全体が花や緑の活動に積極的なことが分かる。

### ②【場所】まちなかガーデニングフェスタ

個人や事業者の自慢の庭や、団体が管理する公園の花壇などの一般公開を行っている。見学者がただ庭を見るだけでなく、庭主と見学者、見学者同士が直接話すことで、交流が生まれる。毎年、春2回秋1回で土日の2日間に開催される。2016年の実績は、春56件、秋40件が公開され、訪問者は約9,000人であった。

市としては、ガイドブックを作成し、自慢の庭を公開している個人宅や事業者の名前、開催の有無、地図を載せて分かりやすく情報提供をしている。

庭主と見学者が直接顔を合わせることで、新たなコミュニティが生まれ、信頼関係が築けていることが分かる。

### ③【資金】ボランティア活動

駅前広場や街路などの公共の花壇10箇所を交流の場として位置づけ、花がらつみや除草等の花壇の手入れを行っている。

この取り組みは、市が公共花壇を整備し、市民ボランティアが花を植えたり除草等の管

理を行い、花の提供や花の生産を市内の花農家が行っている。

市民、市内農家、市の3者が相互に連携を取ることで、活動に必要な資金が最小限に抑えられ、活動に継続性が生まれていることが分かる。

#### ④【情報】各種コンテストの開催

ガーデニングコンテストやハンギングバスケット・フラワーリースコンテストを行うことで、日頃の活動成果の発表の機会を創出している。サポーター通信や専用ウェブを活用した情報共有・発信だけでなく、実物や写真を通して、活動成果を知ることができる。また、日ごろのガーデニング活動を広く情報発信することで、新たな活動者の発掘と活動の拡大を図っている。こうした様々なイベントを通して、市民自ら情報共有する機会を与えることで、市民の意識の高揚に繋がっている。

#### ⑤【他団体との連携】交流の場の提供

市がバスツアーや情報交換会、講習会の開催をし、市民同士、団体同士のレースワーク<sup>3</sup>づくりを行っている。2015年は、こうした取り組みを全20回開催。中には団体同士での情報交換や勉強会も行われている。

各種イベントを通して、市民同士、団体同士の新たなコミュニティが生まれたり、積極的な情報共有・発信により、市民のやりがいにつながっていることが分かる。

### 1-3 協働のまちづくりのキーポイントの整理

市川市の取り組みは、古くから残るコミュニティを失いつつあった市が、花や緑という誰でもできる共通目的を利用することによって、硬直したコミュニティの再生を実現した、「協働のまちづくり」による例である。この事例から、千曲市の「緑の基本計画」による「協働のまちづくり」に適応する要素を整理すると以下のようなになる。

#### 1) 小さなころから花や緑に触れ合える仕組みづくり

小さなころから花や緑に触れ合う機会があれば、興味や関心が湧き、意識の向上が図れる。小さな子供たちが関わっていれば親も影響され、どんどん花や緑に関する意識が高まる。

また、様々なイベントを通して、子供たちが花苗や種を販売し資金調達することで、次の活動に繋がる。

#### 2) 顔を合わせられる機会づくり

誰もが気軽に集まれる空間で、自由な意見が飛び交うような機会が必要である。そこで新たなコミュニティが生まれることもあるだろうし、市民にとって憩いの場になることもあるだろう。お互いが顔を合わせることで、信頼関係も築ける。

また、行政が花壇や公園の整備を行うことで、活動の場を作ることができるし、顔を合わせられる場にもなると考える。

---

<sup>3</sup> レースワーク…人と人との繋がりとは、縦と横のネットワークではなく、レースワークのように複雑に絡み合う。(山下茂 明治大学公共政策大学院教授)



### 3) 市民と行政が一緒になって行う情報の共有・発信の仕組みづくり

市民と行政が一緒になって情報の共有・発信が行われることで、市民自身のやりがいや生きがいに繋がる。また、今まで活動していなかった人がやってみようと思うきっかけにもなると考える。

これらは、「協働のまちづくり」を実現させる上で必要な要素であると言える。

## 第4章 千曲市への提案

### 1-1 グリーン・パーソンの育成

『小さいころから花や緑に触れ合える仕組みづくり』

「グリーン・パーソン」とは、普段から花や緑に関わったり、関心を持つ市民を指す。

1つ目は、前章で分析した市川市の取り組みを参考に「花育」を実施する。市内の全保育園（13園）を対象に、毎年春に園児と一緒に緑のカーテンづくりを行う。場所は保育園の教室の前や職員室の前で、花苗や肥料、ロープなどの必要なものは市が用意し、緑の基本計画推進団体が指導者となる。小さいころから花や緑に触れ合うことで、興味や関心が生まれる。そして、園児たちは家に帰って家族にこの話をすることで、連鎖的にグリーン・パーソンが生まれることが期待される。また、緑の基本計画推進団体が指導することで、団体の知識の向上に繋がるだけでなく、子どもたちの無邪気でひたむきな姿勢に触発され、やりがいを感じたり、健康促進にも繋がる。



写真1 桑原保育園で緑のカーテンづくり



写真2 八幡保育園で緑のカーテンづくり



写真3 水辺の楽校親水公園



写真4 千曲線沿いの植栽スペース

2つ目は、小～中学生を対象に、駅前広場や道路脇の花壇・植栽スペース、市内の公園に花を植える活動を行う。保育園から「花育」をしてきた児童や生徒の、花や緑に関する興味や関心を更に高めるのが狙いである。こちらは先程と同じく、必要なものは市が用意し、緑の基本計画推進団体が指導者となる。公園の候補地は「水辺の楽校親水公園」を考えている（写真3）。面積が3.65haと大きいので、大規模で一団の花による景観を作ることが可能である。また、道路脇の植栽スペースの候補地は、国道のバイパスとして延びる千曲線（都市計画道路）を考えている（写真4）。普段から交通量が多いため、花を身近に感じることができ、たくさんの市民の方の意識を高めることができる。

以前から、自主的に駅前広場や道路脇の花壇への植栽等が行われているが、改めて協働事業として扱うことで、市全体に共通意識が生まれるのと同時に、他市へのPRにもなる。また新しいメンバーが入ってこないという課題も解決できると考える。

## 1-2 グリーン・レースワークづくり

### 『顔を合わせられる機会づくり』

昨年、リニューアルオープンした温泉施設「白鳥園」の中にある、「コミュニティカフェことのは」を候補地に考えている。白鳥園は全5回の市民会議を行い、市民の意見を最大限に尊重・反映していることや、市民交流スペースになることを目的の1つにしていることから、市民に寄り添った場所になっているため、ここを選出した。

他の団体と話してみたい、他の団体と連携してみたい、普段から集まれる場所があったらいい、という市民の声から、ここでワールドカフェのような雰囲気では花や緑について話せる機会を設けたい。実際、2017年には、全市民を対象に、コミュニティカフェことのはで、花や緑でコミュニケーションを取る機会を設けることとしている。2016年度の緑の基本計画推進団体の活動発表や、簡単なミニゲームを通じた交流、コーヒーやお菓子を食べながら気軽に話せる時間を計画している。これをきっかけに千曲市に花や緑の輪が広がることを期待している。また、こうした機会とは別に、普段から市民が集まるような場所になったり、市民同士、市民と行政の新たな繋がりが生まれることも期待している。この取り組みが継続的に続くことで、コミュニティカフェことのはで寄せ植え講習会やバザー等の様々なイベントを開催することも可能であると考えられる。

私は、この取り組みで得たネットワークを活用し、継続してこのような機会を設けたり、市民主体の取り組みになるように運営主体を育てたい。そうすれば、千曲市の協働のまちづくりのモデル事業となり、市全体に協働のまちづくりの意識が高まることが期待される。



写真5 コミュニティカフェことのは

### 1-3 グリーン・コミュニケーション誌の発行

『市民と行政が一緒になって行う情報の共有・発信の仕組みづくり』

緑の基本計画推進団体の活動紹介やメンバー紹介、「花育」の活動報告、それぞれの活動の裏側話などを、取材に基づき市民と行政が一緒になって情報誌を作成する。市民と行政が一緒になって作成することで、市民の活動のモチベーションに繋がる。これを市全体に行き渡らせるために全戸配布を行い、花や緑に関する興味や関心を市全体で高めることもできる。

この取り組みにより、活動しているメンバーのやりがいに繋がるだけでなく、今まで活動したかったけどそういう機会や場を知らなかったというメンバーの発掘にも繋がると考える。また、そもそも緑の基本計画を知らないという課題や情報共有不足の解決も見込める。

### 1-4 終わりに

以上が、私の考える千曲市の協働のまちづくりを更に発展するための提案である。はじめに、「協働」と「まちづくり」について整理を行い、市川市の先進事例を学び、最後に緑の基本計画推進事業にフォーカスし、3つの事業提案をした。

本レポートでは、現在、私が担当している「緑の基本計画」を基に提案を行った。提案を行うに当たって、市民の方と直接会話をする機会があった。会話をしていると、それぞれが千曲市に愛着があって、自慢の千曲市にしようと頑張る市民がたくさんいることが分かった。このような元気な市民と行政が一緒になって千曲市を盛り上げていくためには、行政職員自ら地域に入って活動することが大切だと考える。元気な市民がどんどん繋がれば、ご近所同士の繋がりも増え、千曲市に愛着を持つことに繋がるだろう。私も今回の機会だけでなく、普段から地域に入り込み、市民に最も近い市役所職員になりたい。

今年度、全国地域リーダー養成塾に参加させていただき、このようなレポートを書く機会を与えていただいた。これがレポート止まりにならないよう、事業実施を行い、少しでも千曲市の力になりたい。

最後に、本レポートを作成するにあたって御指導くださった地域リーダー養成塾主任講師の後藤先生、地域リーダー養成塾の関係者の皆様、千葉県市川市まち並み景観整備課の小川課長様、第28期塾生の皆様、そして、私を地域リーダー養成塾へ快く送り出していた千曲市の皆様に、この場を借りて心から感謝申し上げます。

〈注〉

- 注1 ○五加地区 花の会 代表Sさん (H28.10.12)  
○五加の庄花緑コミュニティパーク 公園を愛する会 会計Tさん (H28.10.11)  
○プランター41会 代表Uさん (H28.11.21)  
○東山開発対策委員会 会計Sさん (H28.11.14)  
○園芸福祉ボランティア グリーン“笑”すまいる 代表Fさん (H28.10.17)  
○稲荷山クリーンボランティア 代表Nさん (H28.10.28)  
○中町区ねむの木公園花を育てる会 代表Tさん (H28.10.28)

〈参考文献等〉

- ・阿部齊 『現代日本の地方自治』(1999年) 放送大学教材
- ・大森彌 『自治体職員再論』(2015) ぎょうせい
- ・平石正美 『ヴィンセント・オストロムとポリセントリック・ガバナンス』
- ・後藤春彦 『景観まちづくり論』(2007) 学芸出版社
- ・千葉県市川市 公式Webサイト (<http://www.city.ichikawa.lg.jp/>)
- ・千曲市「千曲市協働のまちづくり指針」
- ・千曲市「千曲市総合計画 後期基本計画」
- ・千曲市「地域づくり計画等に関する説明資料」